

[研究論文]

陶芸教育における包括的な実践の試み

A Practical Attempt in Comprehensive Education of Ceramic Art

椿 敏幸* 大西珠枝* 柿崎博孝** 菅野和郎**
高橋 愛* 宇野 慶** 阿部祐子* 坂本のどか* 加藤悦子*
Toshiyuki Tsubaki, Tamae Onishi, Hirotaka Kakizaki, Kazuo Kanno,
Ai Takahashi, Kei Uno, Yuko Abe, Nodoka Sakamoto and Etsuko Kato

〈抄 録〉

文化庁助成事業「21世紀鷹峯フォーラム第2回in東京」と連携した教育プログラム「焼き物大好き未来世代育成プログラム」を、町田市立博物館の協力の元、玉川大学教育博物館及び同芸術学部芸術教育学科の協働によって実施した。その内容は、焼き物を対象とした対話型鑑賞とハンズ・オン鑑賞、制作、展示、さらには使用に及ぶ、すなわち陶芸の包括的な体験を一連の有機的なプロセスとして教育する実験的なものであった。対象としたのは、知覚性と論理性が著しく発達する小学校高学年の児童で、主に観察・アンケート・感想文から、その効果を検討した。子ども達の嗜好は、プロセスの中では制作に対してもっとも強かったが、先行して行ったグループ学習によるアクティヴ・ラーニングタイプの鑑賞教育が、その関心を一層高めたことが挙げられた。次に制作した皿を家庭という親密な空間で使用、次いで公共空間である博物館で展示し、陶芸というモノによるコミュニケーションの多様性への気付きを子ども達に促した。また印文使用の焼き物を、プログラム共通のテーマとして設定したことに有効性がみられ、そこからプロセスの有機的連関が教育的効果を生むことを確認した。このプログラムの実施と考察の上に、近々に汎用的な陶芸教育プログラムを提示する予定である。

キーワード：陶芸教育、小学生、コミュニケーション、地域連携

Abstract

The Tamagawa Educational Museum and the Department of Arts Education held an educational program “The Practice for Cultivating Future Ceramic Lovers” which was done in cooperation with the “21st century Takagamine Forum” subsidized by the Agency for Cultural Affairs. The program was also supported by Machida City Museum. As the aim of the program was to find an educational method for raising the appreciation of ceramics among K4-6 children, its content became a kind of total experience of ceramics. Namely we applied inquiry-based learning and hands-on learning as

appreciation methods for ceramics before teaching children to make dishes. Next, we let children use their products at home and finally exhibited them in the museum. It is natural that the children's most favorite stage of the program was the making stage, but it is noted that the two types of appreciation experiences conducted before making heightened their curiosity. The use of their own dishes at home and the exhibition were planned to let them notice the possibility of communication through their ceramics as well as giving them a feeling of self-esteem for their products. Lastly, in this experimental program the stamp pattern was always picked up as a main subject in each stage and we find it instructive to make something common through all the process of this active learning for ceramics art.

Keywords: education of ceramic art, K4-6, communication, regional cooperation

はじめに

日本の工芸は世界に誇る文化であり、注目度も高まっている。一方で素材や道具の枯渇、流通の変化、後継者不足、ライフスタイルの変化による需要の低下など多くの課題を抱えていると指摘されている。

これらの問題に対し、さまざまな機関、組織が真摯に調査や支援を行ってきたが、明治以来、我が国の工芸は美術と産業に分断され、全体を俯瞰した情報や問題が集約されにくく連携体制が築きにくい状況が続いてきた¹⁾。

これに対し、「100年後に残る、工芸のために」を合言葉に、美術館・博物館、大学、工房、工芸作家など工芸にかかわる様々な人が集まって、垣根を越えて100年後の工芸のために今やっておくべきことを考え行動しようという動きが始まった²⁾。その具体的活動が、2015年の琳派400年にちなみ、昨年京都において初めて開催された「21世紀鷹峯フォーラム」である。美術館・博物館、大学などが工芸を「見る」「学ぶ」「参加する」様々なイベントを開催し、多くの人々が工芸に触れる機会を設けるとともに、工芸に関係する有識者が集う円卓会議で課題について議論し提言を行った³⁾。

2016年の「21世紀鷹峯フォーラム第2回in東京」では、「工芸を体感する100日間」と銘打って、100近い機関が連携し、300に及ぶ工芸イベントを行い、一人ひとりが工芸を「みて」「ふれ」「体験」し、工芸を取り巻く未来への課題を「考え」、解決のために「参加する」きっかけをつくる総合アクションを都内各所で展開することになった⁴⁾。よき工芸品を生み出すためには、よき使い手、よき鑑賞者が必要であり、特に、「未来の工芸の使い手を育てる」取り組みが重要なことは言うまでもない。2016年は、次世代の工芸ファンを育てる「こども工芸ワークショップコレクション」の企画が新たに設けられ、様々な団体が子供向け・初心者向けのワークショップを開催することが呼びかけられた。

これまで鑑賞教育について共同研究を行ってきた芸術教育学科と教育博物館では、事務局であるCOJからの働きかけに応じ、陶芸の教育モデルを考案しワークショップを行うこととした。すなわち、「みる」(対話型鑑賞)、「さわる」(ハンズオン鑑賞)、「つくる」(制作)、「つかう」(家庭で使用)、「みせる」(博物館で展示)という陶芸作品とかかわる一連のプロセスを地域の小学生に体験させることを通じて、よき使い手、よき鑑賞者を生み出すことにつながる包括的なプログラムの開発を試みた。

今回の実践は、芸術教育学科として、学校教育の授業展開に一つのモデルを提示することができたと同時に、教員志望の学生のための実地教育の機会として多面的な有効性を持つものとなった。

教育博物館は、創立者小原國芳の「百聞は一見に如かず」⁵⁾という言葉に沿って、教育にかかわる実物資料を収集し、活用して、これまでもっぱら学園内のK-12の授業と連携を行ってきた。今回の参加者に近隣の小学校2校の児童が加わったこと及び「みる」ステージを町田市立博物館の協力を得

て実施したことは、教育博物館にとって、地域との連携を深めるプログラムの可能性を示唆するものであり、とりわけ意義が大きい。

「鷹峯フォーラム」事務局では、「こども工芸ワークショップコレクション」参加13機関の実践報告を取りまとめ、「伝える」手法をアーカイブし、今後、全国の教育普及の場で大きく活かしていく「よい伝え方」への手立てを示すこととしている。2017年の第3回「鷹峯フォーラム」は、金沢を舞台に開催される予定である。今回の実践を踏まえて「未来の工芸の使い手を育てる」取り組みが、一層深化し、100年後に残る工芸の実現に向けて歩みが進むことを期待したい。 〈大西珠枝〉

1 対話型鑑賞一みる

当プログラムの導入として、「みる」では町田市立博物館と連携して工芸作品の鑑賞活動を行った。町田市立博物館はアジアの陶芸資料を所蔵する、本学にとっては地域の博物館である。鑑賞には東南アジアの陶芸資料7点を使用したが、作品選定にあたっては町田市立博物館の学芸員および本学の教員と入念に話し合った。①「つくる」につながるスタンプの手法が使われているもの②複数の人数で鑑賞可能なサイズのもの③子どもに身近なモチーフを扱っているもの等を重視し、最終的に、タイ（クメール王国・チェンマイ王国）、ミャンマー（バグー王朝）、中国（漢）などの多様な地域、また紀元前～約五百年前といった幅広い時代から、皿や鉢、装飾パネル、兎形の石灰壺などのさまざまな陶芸作品を選び、それらが町田市立博物館のロビー（無料スペース）に展示された。

続く「さわる」「つくる」につなげるためにも、「みる」では工芸作品に対する親しみを子どもたちにも感じてもらうことが肝要であると考え、作品鑑賞時は、まず自分の目でよく見てもらった。また近年、対話型トークは博物館や美術館で広く活用されているが、「みる」でも子どもたちの気づきを大切に、彼らの言葉から話をつなげてグループ全体で共有するトークを心がけた。よく見ていろいろなことを発見し、感じ、考えること、さらに人の発言から自らの考えを深めること、そうしたことを促し、子どもの工芸作品への興味を喚起することを目指した。加えて、工芸作品の性質を考慮し、機能や用途、技法といった要素にも子どもの注意を向けるようにした。

8月5日（金）、町田市の公立小学校および本学園K12の4～6年生の子どもたちが、3～10人で構成される3つのグループに分かれて参加し、グループごとに約30分間鑑賞した（図1）。まずは工芸や東南アジアについて確認し、その後、作品の前で対話型トークを行った。石灰を入れる兎形の壺（《灰釉兎形壺》・《黒釉兎形壺》）の用途を想像してもらうと、「置物」（壺の上部に穴があるため）「貯金箱」「ろうそくを立てる」「お花をかざる」「お香をたくもの」（兎の尾が取っ手のように見えるため）「カップ」などさまざまな言葉が出てきた。これらは子どもたち自らの観察および自身の経験に基づく連想



（図1）町田市立博物館における対話型鑑賞教育

による発言といえる。また、2尾の魚の文様をスタンプして焼いた皿《褐釉魚文皿》の前で、自分なら魚のスタンプをどのように押すか聞くと「大きなお皿にたくさん魚をスタンプして、広いところでたくさん魚が泳いでいるようにしたい」「1匹だけを真ん中に」「三角形になるように3匹押ししたい」「5匹で丸(円)をつくるようにしたい」等、いろいろなアイデアが出た。自分にもできそうという感覚が彼らの想像力を刺激したようだ。子どもたちは、作品に施された線やかたちなど細部までよく見ていた。トークの締め括りに気に入った作品を尋ねると、トーク時の発言の多寡によらず、文様がスタンプされた焼き物を選ぶ子どもが多かった。身近なスタンプという手法が彼らに親近感を与えたのかもしれないが、偶然にもその後の活動に関連する作品であった。

8月9日(火)の「さわる」「つくる」のステージの終了後に子どもたちに実施したアンケート⁶⁾の内、その日の内容を楽しみにして来たかを問う質問に対して、「とても楽しみだった」を選んだのは18名中16名、残り2名は「楽しみだった」を選んでいった。これは「さわる」「つくる」への期待感の表れであることに加え、「みる」の体験を楽しんだことによる満足感が「次の工芸プログラムも楽しそう」という思いを助長したのではないか。その意味で「さわる」「つくる」へのバトンはスムーズに渡され、子どもたちは大なり小なり何らかのかたちで、まずは工芸作品に親しみを感じてくれたと言えそうだ。本プログラムが彼らにとり地域の博物館を身近に感じ、今後活用するきっかけとなったなら一層うれしい。
(阿部祐子)

2 ハンズ・オン鑑賞—さわる

2.1 ねらいと目標

鑑賞の第2回として、実際に資料を手にするハンズ・オン手法に主眼を置いた、「さわる」を、2016年8月9日に玉川大学教育博物館(以下、本節で「当館」)で実施した。

工芸の場合、眼による鑑賞以外に、掌中で弄する鑑賞法・楽しみ方もある。「さわる」体験を通じ、焼き物に対する理解や興味・関心を深め、同日に引き続いて行う「つくる」のステージに向け、作品制作の意欲を喚起し、表現活動に連動させることをねらいとした。このねらいの下、次の3点の目標を設定した。

- 1 関心・意欲 縄文土器や陶器に関心を寄せ、素材、形状、肌触り、重さなどの違いを実感し、焼き物についての自分の考えを持つことができる。
- 2 協同的に学ぶ力 グループ内の子供たちや学芸員等との交流・会話の中で、他者の感じたこと、考えたことを共有する。
- 3 表現する力 実際に資料に触れ、持ってみることで、自分ならこういうものを製作してみたいという創造力を高める。

また、当館で従来実施してきた資料に触れさせる体験について、実施方法の改善に資することも期した。

2.2 使用資料の選定

「さわる」に使用する焼き物は、「みる」で鑑賞した中国・東南アジアの出土品に対し、比較のため日本の考古資料である縄文土器・須恵器・中世陶器と、生活で使われた近代の焼き物を選定した。また、児童には「つくる」で角皿を作り、スタンプ状の道具で施文することが予告されていたことから、「つくる」で表現・制作する技法との関連性を重視し、施文具の回転・刺突・押捺やヘラ描き等の技法で、凹凸文様の施されたものを中心とした。このように「みる」と「つくる」の両者をつなぐ器形・施文

方法の資料を主眼に、当館考古部門所蔵の土器と、民俗部門の陶磁の食器類の中から選定した。

縄文土器（5点）は、児童により興味を持ってもらう目的で、地元町田市周辺出土の中期の深鉢のほか、皿作りの参考として皿・浅鉢や、比較対象に他の時期や地方の土器も用意した。古墳時代の須恵器壺（1点）は、内外の器壁に工具痕が残る、叩き締め技法で成形したものとした。中世陶器（2点）は、鎌倉時代の瀬戸の印花文・劃花文の瓶子の破片で、「みる」で鑑賞した陶磁器に近い釉調のものを選んだ。民俗資料（5点）はいずれも明治時代のもので、器表面に絵柄が彫り込まれた陶製角形徳利、飛び鉤文徳利のほか、皿は絵付けにより模様が描かれた陶製皿、染付の磁器角皿を選定した。

2.3 実施状況

「さわる」のハンズ・オン鑑賞は、所要時間40分で、以下の要領で実施した。

児童に事前に手を洗わせた後、当館スタッフと挨拶をし、ワークシートと画板を配付した。鑑賞の開始前に、用意した焼き物の時期や用途、制作技法等の特徴を簡単に学芸員から説明した（10分）。

鑑賞は、まず観察として、机上に並んだ焼き物の中で、好きな部分の形状・文様等を選んでワークシートにスケッチをさせ、気に入った理由もメモさせた（10分）。

次に資料に触れ、肌触り・質感を確認させ、感想や比較した結果を記入させた（10分）。

最後に、資料の持ち方の注意をした上で、土器・陶磁器を持たせ、重さ等の実感と共に、どのように作ったか、使ったかを想像させ、感想をワークシートに記入させた（10分）。なお、触れる・持つ体験は、用意した焼き物13点全てで自由に行わせた。

鑑賞体験中、学芸員及び学生の補助員が児童の中を回り、ヒント出し・質疑応答の声掛けとともに、児童との遣り取りを周囲の子供も共有できるように配慮したが、児童も参加者同士で盛んに意見を述べ合う姿が見られた。

2.4 小結

児童にとって鑑賞を意識して焼き物を手取る行為は、これまであまり経験したことのないもので、鮮烈な印象を残したと推測される。参加児童の感想文にもそれが表れており、ねらいと目標は概ね達成されたと考えられる。また、資料・作品に触れることは、モノを通じ、時空を超えて作者と対面・握手することでもあり、こうした経験が、今後児童たちが工芸品を鑑賞する、親しむ行為の契機になることを期待したい。

「さわる」は、プログラムメンバーによる協議を経て、大西の統括の下、全体計画を柿崎、資料選定を菅野、児童の指導を柿崎・菅野が担当し、宇野がこれを補佐した。〈菅野和郎〉

3 制作一つくる

今回実施したプログラムの核となる「つくる（制作）」について、実施概要を紹介するとともに、美術教育を学ぶ学生とともに取り組んだワークショップの計画から実践までの過程について考察する。

3.1 プログラム全体との連携

町田市立博物館での「みる」ステージと玉川大学教育博物での「さわる」ステージに参加した小学生への働きかけとして、その経験値を生かす内容が必要になる。「みる」では東南アジアの陶磁器を鑑賞し、「さわる」では先史から近代までの実用陶器に触れており、参加した小学生は、材質感や様式美について思考を巡らしている。そこで、どちらのステージにも登場した“押し文様”を施した陶

器と関連させながら制作することにより、一層の理解度が深まることを期待した。具体的には、身の回りにある文房具や玩具を各家庭から持参してもらい、既存の押し具とともに印花文様⁷⁾を活用することにした。また「つかう」ステージでの料理の盛りつけやすさを考慮し、多様な料理に対応する平皿（約30cm角）を選択した。

3.2 陶芸制作の理解と醍醐味

陶芸制作の醍醐味は、素材となる粘土の触感と焼き物に変化させるための焼成工程である。今回のワークショップの中では、90分という限られた時間のために、成形工程が中心の内容となった。しかしながら、焼きもの制作を実感するためには、やはり焼成について外すことはできない。そこで、今回は工房内にある陶芸窯を見学し、1000℃以上で焼かれている熱の様を窯の間隙から見ることにより焼き上がりをイメージし、陶芸制作の全体像を理解させることに努めた（図2）。また、粘土の抵抗感を実感するために、実際の平皿を制作する前に子供たちに粘土を配り、自由に伸ばしたりスタンプを押したりしながら粘土の抵抗感や特徴を実感できるように配慮した（図3）。

3.3 学生とのワークショップ計画

今回のワークショップの目的として、小学生に向けた包括的な陶芸教育であることは既述したとおりである。もう一つの目的として、将来、美術教育に携わる学生たちへの実践的な教育機会でもある。玉川大学芸術学部芸術教育学科に在学し「芸術表現演習（工芸）」の授業を履修している3年生7名が今回のワークショップに参加した。大学授業内にて、プログラムの内容や目的を理解したうえで、各自がワークショップ指導計画案を考え、小学生の趣向や筋力などの発達段階に応じた対応策を考えた。また、制作工程の手順や具体的な道具や材料などの準備についても計画してもらった。学生は学科科目や教職科目で得た美術教育に関する知識を持っており、教育ボランティアなどで子供たちを対象にしたワークショップの実践経験がある学生も多い。最終的には夫々の計画案を統合し、当日のワークショップに盛り込むことができた。

3.4 考察

子供たちが眼を輝かせて無心になって制作する姿や、参加者から集計したアンケート結果を考察すると、「つくる」ステージへの興味関心の高さが伺われる⁸⁾。家族で食卓を囲む景色をイメージし、暮らしの中で身近に使用している食器を自らの手でつくりだす。人類が本能的に持っている“ものづくり”への欲求の現れと理解したい。量産品に囲まれ、物質的に満たされている今日の社会だからこそ、陶芸教育や工芸教育の持つ意義が益々大きいはずである。本稿の紙面の都合で記しきれなかった



（図2）玉川大学陶芸スタジオで窯の中を覗く様子



（図3）玉川大学陶芸スタジオでの制作風景

ワークショップの内容は、別のかたちで継続的にアーカイブ化する予定である。先人が残した“ものづくり”の叡智を後世に残すための取り組みとして。
〈椿 敏幸〉

4 コミュニケーション I 一つかう

本章では、これまでの段階「みる」「つかう」に続き、「つかう」段階について報告し、改善点を挙げていく。「つかう」とは、子供たち自身が作ったものを、各家庭に持ち帰り、皿として料理を盛りつけて食事をする、つまり実際に使用することを指す。本プログラムでは、その次の段階「みせる」につなげるため、各家庭で使用するだけでなく、使用した様子を写真撮影し、感想文とともに提出してもらった。

4.1 「つかう」流れ

表にあるように、本学にて2016年8月9日「つくる」段階で子供たちは皿を制作し、施釉と焼成は、「つくる」担当者の椿と学生とで行った。2016年8月19日に焼成作業が完了し、2016年8月21日または24日に、子供たち各自、大学に来てもらい、受け渡した。

「つかう」についての内容は、本プログラム申込み用チラシにて記載している。また、写真で使用例も載せた。「つかう」内容を事前に承諾した上での申込みであったため、子供たちは、プログラム参加前から大まかな内容を知っている。子供たちにとって周知のことではあったが、実際にどのような使用し写真撮影をすれば良いのかイメージできず困る場合もあるため、「つくる」段階の作品制作終了後、高橋から今後の予定確認をした。その際、「つかう」「つくる」についてのプリントを配布し、簡単な説明をした。

「つくる」段階で、①子供たちはその後「つかう」段階があることを知っていること、②「さわる」段階が「つくる」段階の日と同日であったこと、③制作の際に担当者が子供たちに様々なイメージをさせたこと、この3点が「つかう」ための要点であった。この要点が満たされることで、制作直後の「つかう」段階の説明時には、子供たち各自がどのように「つかう」か、をある程度イメージできていたと想定される。

説明は、①皿に料理を盛りつけて撮影をする、②料理は自分が好きなものでも家族が好きなものでも何でもいい、③料理は自分で作っても家族の誰かに作ってもらってもいい、④写真撮影も自分で行っても家族の誰かに手伝ってもらったり撮影してもらったりしてもいい、この4点を中心に伝えた。

学校の授業ではないので、子供たちになるべく自由に楽しく取り組んでもらうために、皿の色と合わせた料理の色や形、写真撮影の時の構図など、料理を盛りつけて写真撮影をする行程時に考える要素やポイントは、あえて指定・指示・助言を省いた。

「つかう」段階は、各家庭で実施した。受け取った日から2016年9月16日の「つかう」写真データ提出までの間、つまり8月後半から9月半ばまでが実施期間だった（表参照）。

4.2 改善

今回のプログラムでは、計画当初より、料理を盛りつけるという使用制限があった。しかし、子供の発想力を活かすならば、つくるものは皿であるけれども、使用するのなんでもよい、という考え方もできたはずである。用途があって皿は存在し、用途を考えて皿は作られるが、提供者が使用者に対して用途を制限してしまえば、これまでの固定化した使用方法しか受け継がれない。また、ニーズに合わせて作られるものも、使用者の要求がなければ、その発展もまた制限されるであろう。

制作者を含めた提供者、使用者がともに「応用力」を持っているならば、鷹峯フォーラムの「100年後」をいうキャッチフレーズを実現しやすい。キャッチフレーズの実現と未来の後継者たちの創造力を育成のため、我々は大学という機関や自分自身の専門性を他の専門教員と協力することで活かし、子供たちにいかに制限をかけず、いかに我々の目的を達成するかが課題となってくる。 〈高橋 愛〉

5 コミュニケーションⅡーみせる

博物館にとって展示は、来館者に与えられる最大の効果であるモノとの出会いを成立させる場であり、あるテーマのもとに選択された展示物やその配列に込められた意図をはじめ、展示物をめぐるさまざまな情報を来館者に伝えようとするコミュニケーション・メディアである。

「みせる」のステージは、陶芸をもとにした「工芸教育プログラム」に参加した子供たちが、「みる」「さわる」「つくる」「つかう」という一連のプログラムで体験した成果を展示という形で発表する場面である。あわせて、文化庁支援事業として行われている鷹峯フォーラムの「こども未来工芸プロジェクト」に関わる「工芸教育プログラム」について紹介することも目的としている。

展覧会のタイトルは「焼き物大好き！ 子供作品展」とし、会期を2016年10月31日から11月13日までの14日間に設定した。会場は玉川大学教育博物館のホール内の第一展示室に入る前に設けた(図4)。第一展示室の最初のコーナーは学園内から出土した縄文土器を展示しているため、「さわる」でのハンズオン体験や子供たちの陶器作品とも関連する会場構成になっている。

展示までのプロセスは、「みる」「さわる」「つくる」「つかう」での実施内容に合わせ、まず展示のシナリオを作成し、次に展示基本設計を策定した。合わせて、展覧会の広報活動のためにチラシおよびポスターを製作した。チラシやポスターのデザインは芸術学部坂本のどか助手が担当し、子供たちの作品とともに各ステージの担当者がまとめた内容解説と各ステージの写真を織り交ぜた構成で製作した。次に、子供たちが制作した作品を実見するとともに、作品を家庭で料理を盛り付けて使用した写真をもとに、基本設計に検討を加え、実施設計を作成した。

このプログラムの内容からすれば、子供たちが展示シナリオの作成や展示作業に加わって実施するのが望ましいのであるが、博物館の業務および時間的制約の面から、博物館主導で展示計画を進めた。展示の導入部には、博物館館長の大西珠枝による挨拶パネル、今回のプログラム全体の解説パネルを設置した。また、本学芸術学部メディア・デザイン学科学生の内藤由伎と松永美波が一連のステージを撮影して編集した映像をパソコンモニターで流した。

子供たちの作品は、ホール内の壁面の前に展示台を使って配置している。展示台の高さは子供たちも多く見に来ることを想定し、高さ70センチのものを使用し、上から器の窪んだ面を覗き込めるよ



(図4) 玉川大学教育博物館における作品展示

うにした。作品を実際に家庭で料理を盛り付けて使用した写真は、子供たちの感想文とともにパネルにして、各作品上部の壁面に取り付けた。動線は導入部から時計まわりに設定し、作品は「みる」「さわる」「つくる」に参加した子供たちのグループで配列している。

展示会期は14日間と短かったが、来館者数は641名であった。なお会期は、教育博物館第二展示室において開催した特別展「デュオ・カサド いまよみがえるチェリストガスパール・カサドとピアニスト原智恵子の世界」と重なっていることから、「焼き物大好き！ 子供作品展」の見学を主目的とした観覧者数は把握できていない。また、会期中会場内に置いたアンケート用紙の集計では、回答数65名のうち、約95%が「たいへんよかった」「よかった」という回答を示している。また、アンケートに記された意見では、このプログラムの有効性を認める声や継続してほしいという要望、また自分も参加したいという感想が多く寄せられている。 〈柿崎博孝〉

6 運営について

ここでは本プログラムの特徴である継続的、段階的な側面から、運営面についても振り返ってみたい。

表は本プログラム全体の進行、運営に関する記録である。縦が時間軸となっており、横にリストアップされた業務がどのようなタイミングで行われたかを大まかにまとめた。なお、例えば「つくる」ステージのワークショップ資材準備やスタッフの確保などといった、ステージ各々の内容に関する準備は含まれていない。継続的なプログラム全体を進める上で必要な項目をまとめたものであることを補足しておく。

次に、本プログラムを進行する上で、特筆すべき点を幾つか挙げたい。

6.1 参加者への段階的な情報共有、メール連絡

今回のプログラム進行にあたり、参加者との連絡は主にメールにて行われた。PDFファイルや写真画像データの添付等も含まれており、参加者（保護者）側でスマートフォンのみならずPC操作が必要となる場合もあることが予想された。始まってみると、やはり参加者側のメールでのやりとりに対する慣れ具合に差があり、一括連絡後にも個別にフォローが必要な場面が少なからず見られた。その為すでにメールにて周知した内容であっても、各ステージ実施の際等参加者に直接会うことができる場面では、できる限りプリント等の形式で資料を作成し渡すように計らった。ただ以後の具体的な連絡事項（例：作品受け渡し期日等）がその都度決まってく中、一度に周知できる内容は限られており、追ってメールでの段階的な連絡が必要になることはやむを得なかった。

6.2 完成作品の受け渡し、回収、返却

「つくる」ステージにて作った器は無論、その場で持ち帰ることはできない。その後陶芸教室にて担当教員が釉薬を施し、焼き、完成後、改めて参加者が出向き、受け取る。さらにその後展示会の為に教育博物館で再度回収し、会期終了後に最終的に参加者へ返却となる。その都度期日や場所を設定し、参加者へ周知し、都合のつかない参加者とは個別連絡を取り…を繰り返した。陶芸作品の受け渡しということで取り扱いにも十分に注意する必要があるが、結果的に、様々な業務の中でも骨の折れた作業として、印象深い。その都度受け渡しの場所等も変わり、中には足を運んだもののうまく受け渡しができなかった参加者もあり（後日改めて再訪となった）、参加者側としても、少々やりとりに戸惑ったようである。

表

	プログラム、事前準備等	参加者募集、 参加者連絡：メール・プリント配布等	作品受け渡し	記録撮影・動画編集	その他
5月	8月5日、9日共通事前準備 【手配】	5月半ば 募集チラシ用素材撮影（「つかう」写真サンプル）			
6月	運搬・移動用公用車（バン）、緊急連絡用公用携帯、動画記録用機材 【作成】	6月半ば- 募集チラシ作成・納品・配布 未			
7月	参加者用ネームシール、 参加証参加者名簿（チェックリスト）、スタッフ証、当日タイムスケジュール、当日配布用プリント 【その他】 運営側当日連絡先共有	7月10日 応募締め切り 参加者グループ分け 7月20日 メール：「みる」「さわる」「つくる」について連絡		7月半ば 撮影・編集学生選出、打ち合わせ	7月15日 教員打ち合わせ①* 7月25日 教員打ち合わせ②*
8月	8月5日 「みる」実施 【手配】 弁当 【作成】 参加証用ハンコ、当日配布用プリント	プリント：「さわる」「つくる」についてのプリント、撮影許諾書・参加証配布 8月8日 メール：「さわる」「つくる」当日緊急連絡先について連絡		撮影	
	8月9日 「さわる」「つくる」実施	プリント：撮影許諾書回収、「つかう」「みせる」についてのプリント、感想文記入用紙配布 8月17日 メール：9日配布プリント内容リマインド	8月19日 （作品焼き上がり） 8月21 完成作品受け渡し or24日	編集作業 24日オープンキャンパス用に「つくる」までの内容で一旦完成、公開	
	8月後半- 9月半ば 「つかう」実施期間 9月後半- 10月初旬 チラシ・ポスター作成・納品・配布 10月半ば 展示パネル各種作成	9月14日 メール：「つかう」写真提出締め切りリマインド、「みせる」前後の作品回収、返却についての詳細連絡	9月16日 「つかう」写真データ提出締め切り（メール） 9月20- 30日 作品、感想文、参加証回収	展示に向けて「つかう」スライドショーの追加等、再編集	
11月	10月31日- 11月13日 「みせる」展示会期		11月13日 展示終了後作品返却	完成、公開	11月12- 13日 コスモス祭芸術教育学科展示にてプログラム紹介展示

①* 内容：【検討事項】記録動画撮影（撮影スタッフ、撮影内容、参加者の撮影許諾）/当日受付（ネームシール、参加証、緊急連絡）/完成した器の受け渡し方法（期日、場所）/支出関連（保険料、アルバイト代の支出元）【報告事項】「みせる」展覧会会期決定
 ②* 内容：【検討事項】展示用作品回収方法（期日、場所）/作品タイトル（必要性、提出時期）/8月9日昼食用弁当手配/保護者の撮影の可否/緊急時対応（当日緊急連絡用公用携帯電話の手配等）/支出関連（保険料、アルバイト代）/COJ支給予算（用途）/鷹峯全体会出席確認/「みせる」展示設営人員【報告事項】プレスリリース実施
 ③* 内容：【検討事項】展示用作品返却方法（期日、場所）/展示終了後の作品返却（期日、場所）/展示内容（レイアウト、制作物）/展示広報物（スケジュール、部数、内容）/報告書（紀要、年報）/編集後映像確認（改良点の共有、以後のスケジュール確認）【報告事項】完成した器の受け渡し完了

6.3 考察と改善案

主催者側としても期日や手段など、具体的な内容を詰めていく中で見えてきた、継続的プログラムならではの負担や手間が少なからずあったのではないだろうか。しかしそれは本プログラムの意義を鑑みれば必要な負担である。参加者側にとってはその負担を含め、あらかじめ全貌を見渡せる状態にしておくことが負担の軽減に繋がるだろう。以後同様のプログラムを実施する際には、その為の工夫が必要なのではないだろうか。具体的な期日が全てあらかじめ決められないにしても、例えば、全てのプログラムに関わるやりとりが示された穴埋め形式（期日や場所などは決まり次第主催者側から周知、参加者側で書き込む）の手引きの作成など、有効な手段は幾つか考えられる。スケジュール・情報共有手段として、また同時に継続的なプログラムのプロセスを参加者に意識させる手段としても有効なツールを用意できれば、情報共有を円滑に、また安心感を持って進められるだけでなく、本プログラムの意義をさらに深めることにも繋がるのではないだろうか。 〈坂本のどか〉

7 博学連携

当プログラムの博学連携の意義を主として博物館の視点から述べる。玉川大学教育博物館では大学や本学園K-12（小学校～高等学校）の教育課程と連携した様々な教育活動を実施している。2015年

には大学とは芸術学部開講科目の「美術科指導法」や「アーツクリティシズム」と連携し、当館所蔵の美術資料を用いた活動を行った。

K-12とは中学年6年生（小学6年相当）を対象とした明治初期の教科書を利用した出張授業や高学年9年生（中学3年相当）を対象とした外地教科書を利用した教育活動を実施した。教育活動の実践に並んで、同年度には博物館所属教員と芸術学部、リベラルアーツ学部の教員が連携して玉川大学共同研究「美術作品を中心とした視覚媒体を活用した教育の研究—VTS美術鑑賞教育を日本に適応した教育方法の形成—」を行った。これは美術資料等の視覚教材を活用した教育活動手法の研究を目的とするものであり、関連事業として2016年2月27日に「玉川大学芸術学部シンポジウム報告 美術教育の現在—学校と美術館の役割とは—」が開催された。今回、21世紀鷹峯フォーラムの一環として、当プログラムにおいて芸術学部と博物館が効果的に連携出来た背景には、こうした学部やK-12と教育博物館の連携実績の蓄積が活かされていることは言うまでもない。

さて、今回の活動の成果は二つある。一つは小学校の図画工作の教育プログラムのモデルを提示出来たことである。2008年の小学校の図画工作学習指導要領では「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことを教育目標に掲げ、また上記の解説には「表現と鑑賞はそれぞれ独立して働くものではなく、お互いに働きかけたり、働きかけたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である」と書かれている。このように、表現と鑑賞を一体化した活動は、今日の我が国における図画教育の活動の指針となっている。その意味においても、今回の活動は「町田市立博物館及び玉川大学教育博物館の鑑賞活動」と「芸術学部教員の指導のもとによる陶芸制作という表現活動」が一体化しており、小学校の図画工作の授業実践のためのモデル事例となる。加えて、参加者（小学生）たちの作品と彼らの感想を博物館でパネル展示をしたことにも意味がある。こうした活動は参加者（小学生）のセルフ・エスティーム感情を高めることにつながるからである。

もちろん、複数の博物館、大学等が関わった今回のような体系的な教育プログラムを小学校の図画工作の教育実践にそのままのかたちで期待することは難しいであろう。しかしながら、規模を問題としなければ鑑賞活動→鑑賞活動に基づく表現活動→児童の表現活動の成果発表という流れは、どこの小学校でも汎用が可能である。特に、我が国はさまざまな工芸文化に恵まれている。従って、鑑賞と表現の一体化した活動は、個々の小学校が地域の工芸文化を利活用することで、今回のような教育プログラムを構築することは可能であろう。特に強調したいことは、授業の指導を一人の図画工作の教員に丸投げしてしまうのではなく、保護者や学校サポーター、地域の大学などと連携して行うことである。今回の活動のように地域の博物館や美術館と協働したうえで活動を行う方法もある。美術館や博物館が学校教育に関わることは学校側にメリットがあるだけでなく、博物館の活性化にもつながる。いずれにせよ、工芸品を素材とすることで、学校と博物館、地域社会が連携した活動を行うことが可能であることを今回のプログラムは実証した。

第二の成果は今回の取り組みが地域社会と大学博物館のあり方を考えるきっかけとなったことである。18歳人口の減少や生涯学習社会の進展により、これからの大学は地域社会との連携がより強く求められている。今回の活動は地域住民に本学や本学の教育に対する認知を高める効果をもたらした。教育博物館で行われた「企画展 焼き物大好き！ 子供作品展」において集められたアンケートをみても、今回のような大学と地域社会の取り組みにほとんどの来館者が好意的な印象を抱いており、「素晴らしい企画だと思います。特に地元の子供達にとって、玉川学園を身近に感じる機会でもあります」や「大学の歴史やその大学に足を運ぶことで、その大学に興味をもたせるのでよいことだと考える」といったコメントを寄せてくれた来館者がいた点は今後の博物館のあり方を考えるうえで注目するべ

き点であろう。

〈宇野 慶〉

終わりに

以上が、当プログラムに協働したメンバーによる実施報告と考察である。

大西〔はじめに〕が指摘するように、今回の活動の発端には、文化庁助成プロジェクト「鷹峯フォーラム」の主旨である〈日本の工芸の活性化〉の意義への共鳴がある。日本の工芸一特に伝統工芸を、いかに存続させ、さらには発展させていくかという問題意識は近年、特に社会的に高まっている⁹⁾。工芸は世界の国々でさまざまに発展してきた。しかし美術と工芸の親近性が高く、また茶道など、元来日常的な営みを芸術化してきた伝統を持つ日本文化にとって、工芸は不可欠な存在である。また日本の工芸は驚くべきことに平安時代以来、海外からも継続的に賞賛されてきた¹⁰⁾。しかしながら現代の大量生産・消費生活の中に、この貴重な営みを担う作り手・受け手双方が埋没していくのではないかという危惧があることも事実であり¹¹⁾、今こそ未来世代への積極的な働きかけが必要とされているのではないだろうか。

さて椿〔3〕が指摘するように、当プログラムの一連のステージの中で小学生の関心がもっとも高かったのは制作である。それはアクティヴな学習意欲の率直な現れであり、陶芸における表現教育の重要性が再認識される。

しかしそのような学習意欲を引き出す効果が二種類の鑑賞にあったことも、今回のプログラムでは指摘された。まず親密で自由な雰囲気の中での対話型鑑賞が、未知の体験に対する小学生の緊張を解き、興味を沸かせたことは阿部〔1〕の報告によって知られる。次に菅野〔2〕が詳述する、ハンズ・オンを中心とした鑑賞は綿密な計画とベテラン学芸員の存在によって可能になったのだが、実施当日の子供たちの好奇心に満ちた振る舞いは、筆者にも容易に観察し得たことであつた¹²⁾。

そして制作と、これら二種の鑑賞が学生を含むファシリテータの適切なナビゲーションによって、大変自然なグループ学習となっていたことにも注意したい¹³⁾。

これに加え、家庭との連携により焼き物の使用を体験させ（高橋〔4〕）、さらに博物館での自己作品の展示体験（柿崎〔5〕）を設定した意義は、次のような点にあると思われる。それはモノによる、またモノとのコミュニケーションの存在を、子供たちに感知させることである。家族と料理を盛りつけることは、親密な会話を促しただろうし、同時に盛り付けられた皿は、制作時とは異なった表情を子供たちに見せたに違いない。次に博物館という公共的空間に展示された自己作品は、さらにモノがさまざまな表情をみせることを、子供たちに認識させたのではないだろうか。物の中には、よくよく見たり触ったりすることによってコミュニケーションに資するモノがあることを、子供たちが知ることが重要である。何故なら、そのような認識は思考を促すからだ。モノは物言わないからこそ、鑑賞者は自己の内面の声を落ち着いて聞くことができるのである¹⁴⁾。

ところで今回のプログラムの目的は、まずは未来世代への工芸教育の具体的なケース・スタディーを行い、そこから現実に汎用可能な工芸教育モデルを作成することにあつた。実際の運営体験から抽出された考察（坂本〔6〕）、及び大学や博物館と、地域との連携に関する指摘（宇野〔7〕）が、今後生かされることを期待したい。

尚、この実践的研究は現在も継続しており、今回の考察を土台に汎用可能な陶芸教育モデルを如何に作成するかという課題を検討中である¹⁵⁾。

〈加藤悦子〉

注

- 1) 美術品的側面としては、文化庁が美術館・博物館の振興、文化財保護法による重要無形文化財指定などにより、産業的側面としては、経済産業省が、伝統的工芸品産業の振興に関する法律による伝統的工芸品の認定、中小企業者への補助などにより、それぞれ支援を行ってきた。
- 2) 「100年後の工芸のために普及啓発実行委員会」が美術館、博物館、工芸教育機関、によって組織されている。一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン (COJ) が実質的な事務局として取りまとめを行っている。
- 3) 2015年12月6日京都宣言「21世紀鷹峯フォーラム第1回in京都 報告書」による。
- 4) 「鷹峯フォーラム」のうち一部の事業については、「100年後の工芸のために普及啓発事業」として、文化庁文化部美術学芸課より「地域の核となる美術館・歴史博物館」支援事業に採択された。
補助金額：平成27年度：約1,800万円、平成28年度約2,600万円
- 5) 小原國芳『劳作教育の実際 序論』(玉川学園小学部編 玉川叢書第二十八篇) 玉川学園出版部 1935
- 6) 8月9日に参加者に実施したアンケート内の質問は以下の通り。「今日来る時、楽しみにしてきましたか？
あてはまるものに、ひとつ丸をつけてください 3-1とても楽しみだった 3-2楽しみだった 3-3どちらかというと仕方なくきた 3-4仕方なくきた」
- 7) 土器、陶器の装飾技法で、成形後、素地がまだ生乾きのうちに、型を押し当て表面に凹凸を与え、文様を表すこと。矢部良明ほか『日本陶磁大辞典』p. 125 角川書店 2002
- 8) 制作終了時に、「みること」「さわること」「つくること」の体験に関するアンケートを実施した。参加者は18名で、回答者も18名。好きだった体験に「つくること」に回答したのは、18名。次回、同じような体験があったらどの体験をしてみたいか、について、「つくること」にチェックしたのは、15名。博物館でどんな体験をしてみたいか、についての回答で「つくる体験」と答えたのは、16名。
- 9) 例えば、国際日本文化研究センターでは2005年に「日本の伝統工芸再考—外からみた工芸の将来とその可能性」をテーマに第27回国際シンポジウムを開催している。
- 10) 日本の工芸では、蒔絵は少なくとも12世紀より大陸で評価されていたことが知られている。また安土桃山時代以降、蒔絵と陶磁器は西洋世界でも珍重された。さらに明治時代の輸出産業として工芸が重要な役割を演じたことについては、近年多くの研究が発表されている。
- 11) 大滝幹夫「市場性を中心に伝統工芸(手仕事等)の展望を探る」『日本の伝統工芸再考 外からみた工芸の将来とその可能性』稲賀繁美 パトリシア・フィスター編 国際日本文化研究センター 2007 pp. 349-362
- 12) 対話型鑑賞については、以下の文献を参照のこと。
Burnham, R. & Kai Kee, E. (2011). *Teaching in the art museum: Interpretation as experience*. Los Angeles: J. Paul Getty Museum.
- 13) フィンランドの教員養成におけるクラフト教育でもグループ学習が重視されている。
三根和浪「フィンランドの教員養成におけるクラフト教育—ユヴァスキュラ大学学級担任教員養成のクラフト教育」『美術教育学』27 美術科教育学会 2008 pp. 539-550
- 14) モノ(美術)との対話が思考を促すという点については、林卓行及びAi Wee Seowが示唆する所でもある。(加藤悦子ほか「美術作品を中心とした視覚媒体を活用した教育の研究—VTS美術鑑賞教育を日本に適用した教育方法の形成—」『玉川大学学術研究所紀要』22 玉川大学学術研究所 2017)
また美術史研究にとっては、既知の事柄である。
- 15) 汎用モデルについては、「21世紀鷹峯フォーラム」中の「こども工芸ワークショップコレクション」参

加団体と協働して作成する方向で進行中である。

〈参考文献〉

- 石原英雄監修 『美術・工芸教育の理論と実践—新しい教師のために』 福村出版 1991年
稲賀繁美 パトリシア・フィスター編 『日本の伝統工芸再考 外からみた工芸の将来とその可能性』 国際
日本文化研究センター 2007
上野行一 『私の中の自由な美術 鑑賞教育で育む力』 光村図書、2011年
佐藤道信 『明治国家と近代美術—美の政治学』 吉川弘文館 1999年
日高薫 『異国の表象 近世輸出漆器の創造力』 ブリュッケ 2008年
Gardner, H. (2011) *Frames of Mind: The Theory of Multiple Intelligences*. New York: Basic Books.